平成２６年度千葉県産業教育審議会（第１回）審議結果

１　日　時　　平成２６年１１月１３日(木)
　　午前１０時から正午まで

２　会　場　　千葉県教育会館　新館４０１会議室
　　千葉市中央区中央４－１３－１０

３　出　席　　７名/１０名
　　委員の過半数出席により成立
　　（千葉県産業教育審議会運営規則第３条）

４　内　容
（１）開会のことば
（２）県教育委員会あいさつ
（３）審議会委員紹介
（４）会長，副会長選出
（５）会長あいさつ
（６）説明　　千葉県産業教育審議会の概要について
　　千葉県教育振興基本計画について
（７）議事
　　協議　　今後の産業教育の魅力発信に向けて
（８）閉会のことば

平成２６年度千葉県産業教育審議会（第１回）

【議事録】

●協議事項の説明（事務局）

本日は，昨年の協議を踏まえ，今後の本県におけるキャリア教育や産業教育についての取組について幅広い観点でご意見をいただきたい。その上で，いただいたご意見を次期千葉県教育振興基本計画に反映させていきたい。（教育政策課より千葉県教育振興基本計画の現状と課題について説明する。）

●議長

ただいまの説明について質問，意見があったらお願いする。

●委員

高等学校でインターンシップを実施している学校では，日数や期間はどの程度か。

●事務局職員

高等学校では，２～３日実施している学校が多い。

●委員

関連して，高校生の生徒の参加率はどのくらいか。

●事務局職員

詳しい資料はこの場にないが，２０％くらいかと思う。

●委員

全国的な調査で，高校生では２０％前後である。

●議長

今までのこの会の議論は，高等学校卒業時のことで終わっている。今は時代が変わり，大学との関連も考えるべきである。千葉商業高等学校でも千葉工業高等学校でも，今は進学者がものすごく増えていると思う。

高校におけるキャリア教育と大学との接続をどのように実践すればよいか。産業教育についてのコメントを出す時，このようなことも入れていかなければならない。

●委員

専門高校を設置する本来の目的は，地域の人材を地域で育てることにある。商業高等学校を卒業したら，地域の商業分野で活躍できる人材になる。工業高等学校もそうだと思う。経済の高度化や少子化の影響もあるだろうが，生徒が思いえがく職業につきたいと思っても，高等学校卒業では就けない時代である。例えば，商業高等学校では，銀行に入りたくても高卒採用はほとんどないので，大学に行ってから銀行に就職する。それは，本来の目的に合っているが，県内の高等学校を卒業してから大学に行って他県に就職したのでは，商業高等学校の本来の役割はない。千葉県の人材は千葉県でつくる。これからの専門高校の生徒が，卒業後３０歳，４０歳になった時に，どの地位で活躍できる人材を育てるかという観点も必要であり，それを実現するためには専門の知識を深めるための基盤となる基礎教育を大学と連携して行い，千葉県の人材を育てる仕組みにする必要がある。

千葉県では，郡部と都市部では状況が全く違う。都市部では人材が県外に出てしまっている。生徒が魅力を感じるのは，自分の住んでいる地域に企業があることが前提である。自分の生活圏に企業があり，将来このような仕事をやりたい，この仕事に就けるんだと思うことが大切である。千葉県の産業を盛り上げていく

ためには，専門高校で学んだ生徒が大学卒業後に千葉に戻って起業することを促すことも一つの方法である。そのような意味で企業との連携の在り方を考え，具現化すべきだと思う。

●議長

産業教育を受けた卒業生がどうなっているかというと，銀行の例では，入行すると１年目から査定がある。例えば商業高等学校卒の行員は，４年後に大卒が入ってきても，高等学校卒の方がランクが上になる。それは，実務を行っているので当然の話であるが，しばらくして支店長レベルになる頃には，逆転してしまう。それは，専門の分野では負けないが，経営という大きな視点から考えることが難しく，そのような教育を受けていない人が多いためではないのか。大学進学を後押ししてやることも大事である。専門高校から進学する生徒が多くなったので，大学との接点をどう考えるかということは大きな課題の一つであると考える。

●委員

千葉商業高等学校は，７割が進学希望者である。高等学校では商業の技術的なツールを身に付け，大学では商業の理論を身に付ける。社会に出たら，その２つを両輪に頑張る人材を育てるため，高大の連携が必要である。

●議長

この間，知事のトップセールスのため台湾に行ってきた。東日本大震災で千葉も被災県になったため，野菜や果物など千葉県産の農産物を買ってもらえない時期があったが，かなり良い方向で早い時期に解除したというところまでいった。農業がどのような位置付けになるのか，農業の教育はどのように進めていったらよいか，その点についての話をしていただきたい。

●委員

これから農業も変わっていく時代にきている。農業は大きく２つに分かれると思う。規模を大きくして外に目を向ける経営と，おじいさん，おばあさんで直売所に出して生計を立てる形態に分かれていく。若い人たちが農業をするにあたり，今までの農業のありようではなく，様々な方面の情報を得て知識を身に付けていかないと，これからの農業は海外と太刀打ちできない。

●委員

父は，南房総市で農業委員長をやっていた。よく農産物に自分で値段をつけられたら，これほど魅力的な仕事はないと言っていた。無農薬野菜を売りにして東京の方と契約し，自分で値段をつけて売るなど，経営的にはいい方向にいっている。農業は，ただ作物を作るのではなく，販売ルートにのせる商業の手法も身に付けるとよい。農業高等学校もやっているとは思うが，このような商業ベースの考え方も必要である。

●議長

千葉県の農業はコストが高い。そこは工夫をしなければいけないが，千葉の農業はインフラの面でプラスになることもあるのではないか。例えば，成田空港の存在は大きい。今海外に輸出しているのは空港に近い北総地区である。千葉の農産物は売れるはずなので，そういったことを考えていけばよいのではないか。

●委員

インターンシップについては，教育と現場をつなぐ有効な方法と認識されているが，当社でインターンシップを引き受ける場合，体験できる仕事が限られてしまう。例えば，現場で就業体験をしてもらおうとすると，最初の２日間は，受け入れにあたっての安全教育にほとんど割かれてしまい，周辺的な業務しか体験できない。それでも全くやらずに過ごすよりは，生産現場を肌で感じる方がいいとは思う。しかし，それが本当に企業理解につながるかどうか。職種にもよるが，ただ単にインターンシップをやればいいんだということではなく，いかにやるのかというところに踏み込んで考えていく必要がある。

ここ数年，製鉄所の現場に入った人たちの離職率が上がってきた。自分のイメージと現実のギャップに直面してやめていく。最初のボタンの掛け違いをなくすために，インターンシップは意味があると思うようになった。インターンシップの方法，具体的な方法について知恵を絞ったほうがいい。

●議長

私も子どものころ，千葉に川鉄できたので見学に行った。凄い会社だと思った。見学するだけでも，企業イメージを持ってもらうことはできる。

●委員

小中学生・高校生を対象に，職場見学を力を入れてやっている。会社に対するイメージをつくっていかないといけない。ただインターンシップは，日数や職務の制約から，なかなか難しいと思っている。

●委員

ドイツのデュアルシステムなどは，育てた生徒を会社が採用できるようになっている。企業の意気込みも違ってくる。果たして企業がそういう位置付けで，高校生のインターンシップを受け入れているのかどうか。デュアルシステムに近いかたちで高校生が週に１日，１年間通して行う中で，企業に育てられた生徒がその企業に入っていくと，離職もなくなる。

このような仕組みは考えられないか。

●委員

やり方だと思う。ただ，企業がインターンシップを通して生徒を育成しても，今の日本では，そこで誘ってはいけない採用システムになっている点が難しい。

●委員

そこを企業の力で変えることはできないか。

●委員

企業の倫理規定に基づき，採用協定等でやっているので変えられないかと言われれば変えられると思うが，これはこれで大変だと思う。また，今のような２～３日間のインターンシップでは，問題の解決にはなりにくい。

●議長

ギルドとは違うと思う。

●委員

ドイツの職人さんは地位が高い。日本の工業高等学校を出た生徒や工業分野で働いている人を見ると，ホワイトカラーの方が地位が高い。この仕組みを変えない限り産業教育はうまく回らない。根本から変えていかないとだめだと思う。

●委員

ドイツの産業事情等を調べてみると，職人の地位は高く，先進国の中でも大学の進学率は低い。大学に行かずに技能者として社会で認知されそれなりの報酬も得ている。そのような生き方は，若い人にとって有力な選択肢であり憧れである。しかし，日本はそうなっていない。千葉と神奈川の製鉄所を両方見ているが，千葉の工業高等学校から生徒を採用しようとしても，千葉県内の生徒はほとんど来てくれない。仕方がないので，日本全国から採用している。神奈川にいたっては，ここ何年も神奈川県から採用できず，全て他県から採用している。首都圏の工業高等学校の生徒はなかなか製鉄所を選択してくれない。地方の工業高等学校

の生徒は，学校での動機付けがしっかりしている。

●委員

これは教育委員会では対応できない大きな問題である。バックアップしてもらうことはできないのか。

●議長

某企業では，商業高等学校卒では課長になれない現実があり，なかなか働き甲斐が感じられないようである。そういうことは，これから企業が考えないといけない問題である。

●委員

小学校に勤務しているので，小学校では何ができるのかを考え，自校の職員の意識改革を図った。小学校におけるキャリア教育は，単に６年生で職場を見学するだけではなく，１年生の入学した時から始まるんだと話している。どの教科においてもキャリア教育を意識していけば，６年間の積み重ねはかなり大きいと考える。まず，総合的な学習の時間や生活科の授業の中で，キャリア教育について一貫性を持つように組んでいる。１年生では生活科のここでキャリア教育を意識してやろう，とか，各学年でキャリア教育の視点をもち，様々な教科で指導している。波ができてきたと感じている。

職場見学では，安全教育を第一に考える。小学生には安全指導やマナーなど細かな指導をして，グループごとに送り出す。見学をすると，学校では見られない児童の表情や姿が出てくるので，とても有効だと感じている。この子，人前でこんなに話せるんだとか，こんなに気のきいたことが言えるんだなど，新しい発見ができるチャンスでもある。本校としては，見学できる企業があるので，大変恵まれている。子どもたちも有意義な時間を過ごしていると感じている。職場見学を行うにあたり，５年生では地域の職業人に来校してもらい，働くことの意義や今こんな気持ちで働いているといった話をしてもらっている。職業観とか勤労観などを意識させてから見学に出したいと考える。

また，担任を通じて，中学校の職場体験についても話してもらっている。ただ，中学校の職場体験は，２日から３日実施している学校が多く，協力してくれる企業は限られており，生徒の第一希望にそぐわないのが現状ではないかと思う。中学校では，職場体験に行く前に求人案内のようなものを作成し，第１希望・第２希望を決めさせるなどの工夫をしている。社会に目を向けながら，プチ社会的な場面を設定して取り組む学校が増えている。単に体験させればよいのではなく，社会に出た時に役立つように考えて取り組むようになってきた。

●議長

入院時に看護師さんから自分の娘の教育について相談され，娘さんとも直接話す機会があった。親も自分の処遇で苦労しており，子どもには同じ思いをさせたくないという気持ちが強いようだが，現場ではどうか。

●委員

看護のインターンシップは看護協会と連携を図って取り組んでおり，協会からの依頼で近隣の中学・高校生を引き受けている。病院では受入れに際して，担当する病棟と看護師を決め，看護師の１日体験をしてもらっている。看護学部が増えており，当院では７校引き受けている。１年中看護学生が１校当たり５人から６人来ている。多い時は１つの病棟に２校入っており，年間延べ２２００人くらい看護学生か職場体験の生徒がいる。うれしいと思ったことは，採用面接でどうしてこの病院を選んだのか理由を聞いたところ，「高校生の時に当院で職場体験を行い，高等学校を卒業して看護学校に行ったら是非この病院に入りたいと思ったから」と言ってくれた受験生が数人いた。職場体験を通して憧れの像ができると来てくれるんだと実感した。

●議長

私も日頃から，看護にたずさわる方々は，大変使命感を持っていると感じている。

●委員

看護協会から依頼があり，県立高等学校と私立高等学校で出前授業を行ってきた。「高校生だと血に弱いが大丈夫か」とか，「針を刺すことは苦手だが看護師になれるか」などの質問がきた。「誰でも最初は怖いが，患者さんの病気を治す，この人を悪い状況から良くするという使命が出てきた時に怖くなくなる」と説明してきた。

●委員

今後の魅力発信について，いくつか提案したい。専門高校が小中学校と連携する余地として，生徒が小中学校に出かけていき，直接小中学生に指導するやり方もある。小学校の生活科では農業体験をやっているし，総合的な学習の時間ではものづくりに取り組んでいる。こういうところに，農業高等学校や工業高等学校の生徒が出かけて行くとよい。出前授業だから先生でもよいが，魅力発信としてはあまり効果がないと思う。

また，地域の産業界と連携した取組としてインターンシップの話があったが，１日から７日間程度では，本来のインターンシップとは言えない。産業教育の一環として行うインターンシップは，教科科目に位置付けてもっと長期間実施すべきだ。

インターンシップと就職採用活動を結びついてはいけないという問題がある。しかし，そういうことがあってもいいのではないか。かつて文科省の委託研究を行い，日本版デュアルシステムについて報告したことがある。高校生の長期インターンシップで企業と生徒が相思相愛になった場合，企業が求人票を出すなどの所定の手続きを踏み，採用の内定が選考開始日以降であれば，早期採用にはならないのではないかと結論付けた。

加古川市の東播工業高等学校の例だが，産業界と学校と市が連携し，市が発注する建設事業については，入札条件の一つに高校生のインターンシップの受け入れがあった。

産業界との連携についてもう一つ。生徒を企業の最新施設設備に触れさせることを提案する。また，地域の職業人に来校してもらい，授業をやってもらうのはどうか。最新技術について学ぶことは，それを動かす人から教えてもらうことも含まれるのではないか。過去に国の事業として，地域人材の育成を目的に全国でいくつか地域を指定して行った際，学校は地域の職業人の授業をなかなか受け入れてくれない。地域の人が学校に来て授業を行っている場合でも，教育課程のどこにも位置付けられておらず，放課後の特別な活動とみなされていたようであった。様々な教科科目の中で，地域の方に授業をやってもらう。これは商業高等学校でも可能だ。流通に関しては，スーパーの人やマーケティングの専門家に来てもらったり，先生と一緒に授業を行うやり方もある。連携を進める過程で県教委から働きかけ，千葉テレビなどで積極的に取材してもらい発信する。メディアを通じて発信していくことが是非とも必要なことだ。

「開かれた産業教育」をキーワードに，学校は打って出る。必要な人に来てもらう取組を積み重ねて行くことが大事だ。

最後にもう一つ。専門高校どうしの連携による魅力づくりについて述べておきたい。例えば神奈川県では農業高校で作った材料を家政科の生徒が調理して地域の人にふるまっており，そこで出た生ごみは農業高等学校に持ち帰って肥料にしている。また，愛知県の半田地区では半田農業高等学校が四角いスイカを作っているが，その型箱を作ったのは半田工業高等学校，全国に発信したのは半田商業高等学校である。これもメディアに広く取り上げられた。このような取組を情報発信していけば，魅力づくり，魅力発信になるのではないかと思う。

●議長

マスコミ等が現状を取り上げ，多くの人に伝わらなければ何にも生まれない。千葉県にとって大事だと思うことは取材してもらい，地元のテレビでよいので出してもらうことが大事である。

先に話した台湾でのセールスは，同行取材してもらったので，毎日のようにテレビや新聞に取り上げられていたと思う。先週は，北海道に行ったが，これも同行取材してもらった。機会があったら，発信することが大事だ。

●委員
学校もマスコミが取り上げるようなことは発信している。マスコミが取りあげた上で，さらに企業が認知してくれなければ意味がない。また，入社前提で長期インターンシップをやってもよいのではないか。なぜかというと，長期インターンシップは生徒に負担を強いることになるからである。生徒が希望する職業に就くために大学進学を志す場合，入試で「高等学校時代に日商１級をとりましたか。」と聞かれても，取得していなければ「ダメですね。」となってしまう現実がある。インターンシップの成果等を企業や大学が認める仕組みがないと，学校を経営する立場としては，生徒をよりよい将来に導けない。

●委員
ＡＯ入試は確かに資格を持っていることが一つの条件になっている。私の経験で言うと，ＡＯ入試の面接で，「私は課題研究でこんな調査研究を行いました。これが私の調査研究の成果です。」と研究内容をまとめたファイルを面接会場に持ち込んで，面接官にアピールした学生がいた。資格だけという見方はしていない。面接の時に「インターンシップで，こんなことを感じました，自分としてはこんな成果がありました。」と言えば，おそらく大学は入学許可を出すと思う。

●議長
そういうことができる人は頭がいい。

●委員
企業も大学も，高校生を見る物差しが皆違う。その物差しに合わせていかないと，その生徒自身の将来を拓いていくことができないのが現実だ。中学から高校に入るときの物差しは一つだが，その後はいろいろな物差しがある。学校はその多様な物差しに合うように生徒を育てて行かないと生徒の進路を保障できない。

●議長
定年まで辞めずに同じ職場で過ごすのが日本人だが，アメリカ人は全然違う。給料を上げてくれと来る。特に女性は，係長とか支店長代理とかポストをくださいと言う人が多い。会社を移るのは何とも思っておらず，例えば千葉銀行ニューヨーク支店のポストで他の銀行に行ってしまう。日本もいずれそうなるかもしれない。事務局から他にあればお願いします。

●事務局職員
今日は，産業界の話等を伺い勉強させていただいたが，小中学生は専門高校のイメージを持ちにくい事実がある。小中学生が専門高校に関心を持ち，幅広く自分の将来を考えるためには，どのようなことが役立つのかお聞きしたい。

●議長
小さいうちからイメージを持たせない方がいいと思う。追々考えていけばいい。その時に大事なのは，親だと思う。

●事務局職員
小学生には，商業高等学校のしくみ等はよくわからないようだが，どうか。

●委員
ものづくりフェア等の案内が小学校にも来るようになり，その都度印刷して全校に配るようにした。学校からも親子で参加してくださいと入れたりした。私もこの審議会に出てから，チラシ等も意識して見るようになった。先生がそのような意識を持たないと，子どもたちに伝えるのは難しい。小学生でも夢や目標をしっかり持たせることが大事だと思う。私も上手くコーディネートできるよう，小学校でやっていきたい。

●議長
僕らの時代は，千葉商業高等学校で野球をやりたいということがあった。それと似ていると思う。子どものころから近くの人に接する事が大事だと思う。
学校もいろいろと工夫している。私がかつてＰＴＡ会長を務めた私立高等学校は，全県にバスを出しているので地元から来る生徒が少ない。そこで，その高等学校では地元との交流の機会をもつため，地元でとれた野菜等の即売をやった。もう十数年前のことだが，まだ続いており大変好評とのことだ。このようなことの積み重ねが大切である。

●委員
高校の先生，小中学校の先生，保護者を交えての話し合いや，魅力づくりに関する提案をもらう機会はあるのかというと，全くないのではないか。

●議長
企業は様々な方法でやっている。銀行では中学校の先生に来てもらって，銀行業務を勉強してもらうなど，多くの企業がやっている。

●委員
企業はやっているかもしれないが，学校は行っていないのではないか。

●委員
学校はやっていない。

●委員
例えば，商業高等学校が近隣の小中学校やその保護者と商業教育はこんなに素晴らしい，さらに魅力的な教育にするにはどうしたらよいか，等を話し合う場はない。県レベルや地域レベルでもない。だからお互いによく知らない。隣同士で学校が並んでいても，先生の交流はほとんどない。地域の小中高等学校の先生方が専門高校の魅力発信に向けて，もっと話し合うような場があればと思う。

●委員
本校で実施しているのは，開かれた学校づくり委員会，ミニ集会，年４回の学校説明会である。中学校の教員を集めることはない。中学校の進路指導担当は毎年変わるので，毎年説明しなければならない。産業は全県１区なので，全ての学校に説明しなければならず，中学校の仕組みづくりをしてもらうと高校も助かる。

●委員
うちでは，中学生や特別支援学級の生徒を対象に農業体験を受け入れているが，学校から依頼されたわけではなく，こちらから声をかけて始めた。受入れ体制は十分なので，活用してもらいたい。

●議長
交流することが大事だ。では事務局から，今後の予定を含めてお願いします。

●事務局職員
これを持ち帰って，次の教育振興計画に反映させたいと思うのでよろしくお願いいたします。